

映画も半ばを過ぎたあたりだろうか、いずれも「織る」に関わる仕事に情熱を傾ける3名の年齢や性別もまちまちな登場人物が、それぞれの顔を固定のクローズアップで捉えるカメラの前で、続けざまに、各々の想いや身体のリズムに沿って、自分について語り始める。海外での個展や受賞といった自分の夢を生き生きとした口調で語る、染色を専攻する若い女性。

どんな内容でもいいから自由に話してください……といった少し無茶な問いかけに応じなければならなかったのか、当初は戸惑いを隠せずにいるが、それでも、軽くあいづちを打つ程度で沈黙を守る質問者（監督）を前に、力織機を使ってどこまで手織に近い水準の織物に到達できるかが自分にとっての課題であり続けてきた、と話す初老の男性。そして、亡き父の記憶を語ったうえで、それまで近くて遠い存在だった母親が認知症になり、それ以降、いろいろなわだかまりが解消された気がする、といった内容を独特な語り口で言葉にする中年の女性……。

これまで本作を見続けてきた僕らを驚かせることに——そもそも女性の語りの背景にフラメンコの音楽が流れることも驚きだったが——、ここで画面はいきなり未知の老女の顔のクローズアップに切り換わる。彼女は一言も発することなく横たわり、ほとんど目を閉じようとするかのようになり、あるいは生死の境を彷徨うかのように見える。もちろん、それまでの語りで対象となった女性の母の顔なのだろう……。

本作は、古くからの日本の伝統的な産業や芸術ながら、後継者不足などで今後が懸念される「織物」を単に賛美したり、その記憶を後世に残すために撮られた映画ではない。

タイトルに掲げられた「織る」は、「織物」に還元されることなく、いくつもの意味を多重に帯び、魅惑的な重層性を形成する。

たとえば、それぞれの人生を背景に「織る」に関わることになった人々は、各々の語りによって自らの「人生」の軌跡を織りあげる。人生を「語る」こととは、すなわち物語を「織る」ことなのだ。このドキュメンタリー映画それ自身が「織物」を模範としているだろう点も重要だ。前述の3人の作業や語りを撮影したショットを、それぞれのリズムを活かしつつモンタージュし、一本の映画を構成する作業は、織ることの実践に似ており、映画もまた「織物」なのだ……との認識へと僕らを誘う。

固定ショットが基本の本作において例外的に手持ちカメラで撮影されるシーンがあるが、そこでのゾン・ピロン監督はおそらく作業場での力織機の作動ぶりに感嘆を覚えている。織物に使用される機械が、かつてフィルムで撮影され、編集や上映も行われた時代の映画諸装置（機械）の記憶を想起せしめるのだ。

こうして本作は、「織る」ことを介して、「撮る」ことや「編む（編集する）」こと、そして「上映する」ことの意義をも問う映画となり、織物への考察が映画へのそれと二重写しになる。本作の「上映」に立ち会い、「織る」ことの重層性を浮かびあがらせるべく織りあげられた映画＝織物（テキスト）を完成へと導かねばならない。

北小路隆志（映画評論家）

© 2019. Zonpilone Xmedia Film. All Rights Reserved.



存秘園自由人映画

各々の語りによって自らの「人生」の軌跡を織りあげる

織る

飯井照夫 / 伊達愛子 / 中平美紗子

企画 演出 撮影 編集 ZON Pilone

2019 / Color / Sound / 60min / HD

製作 存秘園自由人映画 / 京都造形芸術大学院芸術研究科

助成 存秘園自由人映画